

二 つ の こ と

学長 鯨 坂 二 夫

1. 遠き日のこと

それは新しい憲法が制定されて間もなくのことであった。その記念式典が行われ、私も在京の故をもって参加が許された。遠い日のことである。場所は宮城前の広場。天幕だけが張られ、まことに質素そのものであった。その参加者の中で、何人が今生存しているか。そのような思いが浮かぶ現在である。

天皇・皇后両陛下が御臨席遊ばされ、天皇の御言葉があった。敗戦の祖国を、ともどもに、この新しい憲法によって興こそうという意味のこめられたお言葉であった。明治に生まれ、明治憲法のもとで人となり、二度も戦争に参加して、歴史的な敗戦の苦悩をなめ、そしてこの日、この式典に列したことは、私にとって身にしみて忘れ難い切実な経験であった。戦争の意味は何か。何故に戦ったのか。その是非はだれが、如何なる権威において、或は、如何なる根拠によって決定し得るのか、また、勝者が敗者を裁く権利は、どこから、どのようにして生ずるのか、私はそのような問を私自身に問いかけてみた。

そして夜は、日比谷公会堂で記念の講演会が催され、私もそれに出席したことであった。講演者は二人。時の文部大臣、安倍能成氏と憲法担当の大臣金森さん。はじめに安倍文部大臣がお立ちになった。今に忘れない。はじめ見たあの美しい白髪の哲学者大臣。そして、まことに意外な言葉が聞かれたのである。「我々は長い間、神州不滅を念願した」と。そのことは確かな事実なのである。一億の国民がこの四つの文字「神州不滅」を唱え続けたことは否定できない。しかし、今、この日、この時に、この場所で、敢て神州

不滅と言うことの真意は何か。それは、まさに禁句ではないか。私は正直にそのように思った。ところが安倍さんは更に声をはりあげて続けられた。「私は、今もなお神州不滅を念願している」と。これはえらいことになった。大臣は正気なのだろうか。占領下であり、マッカーサー元師の旗はすぐ近くに翻がえっているではないか。それなのに、今もなお神州の不滅を念願していると宣言する。明日のニュースになろう、大臣の座は危ない。私はそのように感じたことを忘れない。ところが文部大臣は続けて、「その神州不滅を新しい憲法で実現するのである」と落ち着いた調子で結ばれた。「神州不滅」と訴えて、明治の男をなだめ、「新憲法でそれを実現する」と諭して、若い人びとを満足させる。さすがは老碩学だと感じ入ったことであった。それにしても、あの場で「神州不滅」という表現を敢て使われた不屈な剛胆さと識見には恐れ入るのほかなかった。安倍さんの面目躍如たるものがあり、明らかに古武士の風格をそこにかいま見たのである。

金森さんは、まことに温和な口調ではじめられた。「憲法が変わりました。主権在民であります」と。主権在民という言葉は、この時、はじめて聞いた私であった。明治憲法では「神聖にして犯すべからず」と定められ、天皇は神格化を伴った主権者であられたのに、その「主権」が「在民」だという。私は、困惑した。天皇の存在はどうなるか、ポツダム宣言受諾の際のただ一つの日本側の条件は「天皇の地位に変化のない限り」とあったではないか。それを「主権在民」と言う。一瞬、不安というほどのものが脳裡をかすめ去った。と、金森さんは淡々として「天皇は国民統合の象徴であります」このように説明された。これは苦心の作だな、私はそのように思った。とは言え余りに抽象的に過ぎるではないか。象徴とは芸術的、哲学的表現であって、法的なそれとは受けとれないのではないか。法についての教養をもたない私は、一瞬、戸惑を覚えたことであった。そうして、次ぎの瞬間、今一度、苦心の作だと思った、内に対しても外に対しても。それにしても、生身の人間を、象徴としてこの時に、この憲法に規定することの巧みに驚ろき入った自分を、はっきりと覚えている。

「基本的人権は平等であります」と金森さんは続けられた。それは、いいことだ、そうなければなるまい。これがいわゆる民主主義の法的土台かな。私は独りでそのように解釈した。如何に多くの人々が平等な人権を踏みにじられ、差別に苦しんだことか。日本の歴史のなかに、それはありありと残されている。これからそれがあってはならない。断じて。そのような理念の光が、さっと差し込んで来たことであつた。金森さんは強調された。「その平等の何よりの原型は選挙の一票であります」と。

続いて「男女は同権であります」と論旨が進められた。これはいいことだ。すばらしいことだ。母を見よ。妻を見よ。何故に今までそうでなかったのか。私はそれまで、母や妻に選挙権の無かったことを、かつて一度も、それが間違だと思ったことはなかった。はじめて女性に選挙権が与えられた時、投票場への道すがら、小学校に上がったばかりの次男にそのことを指摘され、答に窮した私であつた。薩摩に生まれ、家父長家族のなかに生い立ち、男女の別、——それは日常茶飯事から、こみ入った人間関係や生活様式に至るまで、根強い家族制度の規制の中に見られた——でしつけられた私は、当然、骨の髄まで文字通り封建的であつたことを否定できない。その私が端的に「同権」を納得したのである。自己革命と言うのほかはない。何か知ら、肩の荷がとり去られて、すーっと軽くなった感じであつた。

「戦争は絶対に致しません」金森さんは戦争廃棄の条項については姿勢を改めて毅然として、引締まった句調で説明された。私は拍手を送ろうかと思うほどの感傷に浸った自分を感じた。そして一瞬、過去三十余年間の思い出特に高校時代軍事教練を受けた頃からの軍によって導かれた数多くの事実が走馬灯のように走り去つたことであつた。徴兵検査、甲種合格、入営、幹部候補生、秋季演習、戦時命下、歩兵第四十五聯隊野戦小隊長、満州事変、支那事変、召集、補充隊中隊長、大東亜戦争、種子島兵团通信隊長……、敗戦、号泣した兵達、…あの山、あの川、あの海…若くして散華した戦友たち……すべてがはばかり知れない巨大な魔力で動かされた。それは歴史の悲劇、人類の業、神々の過誤。

「弾丸^{たまたま}と叫びて逝きし若き射手の引き金握りし指ははなたず ……重機関銃弾着観測の姿勢のまま鉄兜貫きて命絶えたり……（ノモンハン）……ここはお国を何百里……赤い夕陽の満州に友の塚穴掘ろうとは……同期の桜……銀翼連らねて……花も蕾の若桜（学徒出陣の歌）」……「息絶えた兵のむくろに、俺は手をあわせ、ただ祈る。故国の父母よ、同胞よ、知れ。兵の苦難は終れりと」死の行進序曲、三井為友著「南海虜囚の詩」より。………そうして遂に広島・長崎の原子爆弾、……人類最大の誤謬、最悪の罪禍。

それ等の一切をこの憲法によって洗い流がそうとする。人間は平和を愛し、それを念願する前に、徹底して戦争を拒否する行動をとることを恐れてはならない。「それは日本民族の永劫にわたる悲願であります。この憲法が平和憲法と言われるのも、その故であります」金森さんは諄々として説かれた。牧師は神の愛を説き、僧侶は仏の慈悲を語る。それは専門職としての彼等の義務、仕事、というほどのものであろう。しかし、あの夜の金森さんの言葉は、それらのものとは本質的に違った迫力と熱情にみちていた。それは民族の歴史を徹底的に反省し、批判し、新しい世界に向かって飛翔しようとする日本人一人ひとりの決意を促がすほどの広大な世界観と人間としての誠実さに満ち溢れた言葉であり、私自身、過去の自分を批判しながら、ただひたすらにそれにきき入ったことであった。

「憲法が変りました。やがて遠からずして民法が変りましょう」金森さんは、こう続けられた。「家族制度が根本的に改められるでしょう。ここでお願ひしたいことがあります。それは、どのように家族制度が変えられても、日本の家族の生活の中にあった美しい点まで変えようとするものではありません。どうぞこのことは後の世の人びとに伝えていただきたい」と。日本の家族の生活の中にあった美しい伝統。その表現はたしかに抽象的である。はたして金森さんがその言葉の中にどのような事実を意味されたのか、それは今日まで私の脳裡を去らない問題点である。しかし、今、その金森さんの心配が私たちの周囲に見られるのではないか。私は時折そのように現在の時勢を疑うことである。金森さんが御在世ならば、今の日本の現状をどのように

感じられ、どのように批判されるであろうかと。

或る結婚式でのことである。私も招待をうけて喜こんで出席した。式は順調に進み、親友たちの祝福のバンドの演奏などもあって、花嫁花婿の幸福もさることながら、この花婿を女手一つでここまで育てあげ、大学院博士課程を修了させた花婿の母親の姿は聖らかなものに見えた。崇高という表現を用いても決して不自然とは感じられないと私は思った。やがてその祝宴も終りが近づき、仲人の挨拶につづいて夫婦のお礼の言葉があるという。近頃の若者は行き届いたものだと感じ入った。花嫁花婿が起立、そしてこの秀才らしい花婿は弁舌さわやかに謝辞を述べ、そして最後にはっきりと宣言した。

「〇子は、私の妻であって、決して家の嫁ではありません。……」私は心の中むらむらと怒りに似たものを覚えた。妻であって嫁ではない。それはその通りなのである。高等学校の社会科の答案ならばそれで間違っていない。教科書もそのように書き、教壇に立つ教師もそれが新らしい家族関係だと教えるであろう。しかし、その良き妻であり、やがて良き母になるであろう花嫁が、よき嫁であって何が悪かろうか。アメリカの優れた社会学者、パーソンズは、家族関係について夫は夫、妻は妻であり、親は親、子は子である。その役割も、その力もそれぞれに違う。しかし、この違った役割と力とが愛の義務によって結ばれるようにと提言している。私も知っている、封建的な過去の日本の家族制度の中で、どの位嫁が辛い生活に堪えなければならなかったかを。しかし、それは制度的な束縛や拘束の故であるというよりも、その根底に存在した人間関係の次元の低くさによったものではあるまいか。「愛の義務で結ばれる」という絆があれば、制度や因襲による悲劇は自ら改められ得るものではあるまいか。それを、「妻であって、嫁ではない」と新らしい制度と因襲に置き換えようとする。「愛の義務」など微塵も見られないではないか。金森さんが言はれた「日本の家族にあった美しい伝統」の課題の一つがそれであるのではあるまいか。そう思いながら花婿の母上を見ると、白いハンカチで、そっと涙をふいておられた。それは決して嬉し涙ではない、明確にくやし涙であると私には受け取られた。

いま、私たちのまわりの多くの家族をめぐる問題の一つは、愛の義務で結ばれようという求心的な力が弱くなり過ぎて、夫と妻、親と子がそれぞれに分離対立しながら、多く離心的に自己主張に明け暮れるところにある。愛の義務とは、他者に生きる試み、他者の実現を真の自己の実現とする業にはかならない。愛は犠牲なのである。犠牲は苦しいことに違いないが、それでいて、それがたとえようもない歓喜であるところに愛の積極性がある。金森さんが訴えられた「美しい点」がそれではなかろうか。

一軒おいて隣りに内孫三人。私が一番幸せなのは、この三人の孫たちと一緒に風呂に入る時である。夏であった。今に忘れない、幼稚園に通っていた下の孫娘を、いつもその父親をそうしたように、体を洗ってやり、手足も流してやり、頭も綺麗にして、「あー、お利口だった」と言う、いつもそのまま上って行くのであったが、ふと立ち止まった。そして私の胸のあたりをじっと見つめた。発見したものらしい、はじめて。「おぢいちゃま、それは何か」とたずねるのである。ブルーナならば発見学習と言うであろう。私はすぐに答えた。「オッパイだぜ」と。するとこの幼稚園生は権威をこめて強くそれを否定した。オッパイはお母ちゃんだけが持っている。私は、感嘆した。何というすばらしい哲学か。オッパイはお母ちゃんだけが持っている。私はその時、決心したことであった。この次ぎは必ず女に生まれるぞ、この膝にしっかり赤ん坊を抱いて、みち足りるまでこの乳を飲んでもらいたいと。

母が亡くなったのが十三年前。十八年半もの闘病生活であった。「よくもちました、十八年半、何も薬はありませんでした胃の薬ばかりで」医者がこう言われた。「一番よかったのは先生のお孫さん。一軒おいて隣り。いつも遊びに来ておられた。伝染病じゃなかったからお年寄りの枕元で着せ換え人形やままごとをしておられたのをお見受けしました。あれが一番よかったでしょう。」私もそう思う。それが何よりも良かったと。

下の孫が幼稚園から小学校に上がった時のことである。イヤホーンの電話がかかってくる。この時は、この娘が書いた手紙が私の家のポストに入って

いるのである「ポストを見ましたか」と。「見ますよ、だれに書きましたか」
 「ネンネのばーちゃんに書きました」これには驚ろいた私であった。一体、
 どの大人が死んだ人に手紙を書くであろうか、思い出の記は書いても。し
 かし、子どもは書くのである。読んでみると書かれているではないか。「う
 ちのお庭に赤いチューリップの花がきれいに咲きました。ネンネのばーちゃ
 んとこはどうですか。はるさんは学校に行って○をたくさんもらいました…
 ……」と。「この手紙をどうする」ときくと、だれが教えたものか「折りた
 たんで笹舟に乗せて加茂川に流せば、きっとネンネのばーちゃんにとどく」
 と。笹舟ではいけないというので当時大学院生であった次男が板を切ってく
 れ、それに折りたたんだ手紙をのせ、紐でゆわえて、二人行って加茂川に流
 したという。確かにネンネのばーちゃんに届いたに違いない。

これは書けと言われて書いたのではない。この小学校一年生の自由意志に
 よって書かれたのである。十八年半寝ていた老祖母、いつもその枕元で遊ん
 だ、その死も、まざまざとあの部屋で親戚の皆んなと一緒に見た。そして唇
 に水をつけてやり、白い菊の花でその柩を飾ったという雰囲気がこの娘に手
 紙を書かせたのである。それは教えざる教育とでも言うのほかはない。友人
 の社会学者は、この話をするを私に禁じている。現在の日本ではこのよ
 うな形の家族のあり方は稀なのだと。父母は京都に住み、子供夫婦は東京に、
 そして孫は博多に、という形が多いという。私はその禁を犯かしたことになる。
 金森さんがこれを聞かれて果たして何と評されるか。日比谷公会堂の講
 演は今もなおありありと私の耳にきこえ続けている。

2. 近き日のこと

「一つの花が美しいことを何人も知っている。しかし、その美の本体が何
 であるかを見とどけることはむづかしい。キクの花の美と、ユリの花の美は
 異なり、仏像の美と盛装をこらした女性の美にも、また相違がある。しかし、
 その何れもが人間の魂を揺り動かすほどの美をもっているのである。また音
 に美を感じるといっても、すべての音が美しいのではない。柳の緑も、花の

紅も美しいには違いないが、しかし、人は自分の顔を美しくしようとして、緑や紅を塗ることをしないであろう。純粹に個性的なるもの、煩わすものもない自由、そこにはこのようなものが望まれる。一つのユリの花に対して概念を媒介として、知的態度で対するのでもなく、また意志を媒介として行為的態度で立ち向うのでもなく、何ものにも媒介されない生活、人間と彼に対するものとの直接的なつながり、直観的態度が必要なのである。人間はいつも概念や意志によって自己自身を縛らなければ生きられない存存である。そのことは捉われた人間の宿命でもあろう。しかし、人間が一つの花に対したとき、その花を概念や意志の対象とせず、ひたすら形と色に見入り、そこに溶けこんでゆく自分になろうとする態度を自由に求めようとすることがある。それこそは美の態度であり、直観の態度であろう。ここには個性的生命と自由がある。……このような自由な直観性のなかに、美の根源的原理が存在する……したがって芸術家が自然や人体を求めて描こうとするのは、自然や人体のもつ客観的事実そのものを実現しようとするのではなく、それらのものを見ることのなかに自覚される捉われない自由な自己の生命の表現である。芸術は自然や他の作品を模倣する技術ではなく、自己の自由な生命を自覺的に形成するはたらきである。そこで重んぜられるのは技術的に到達し得る客観への現実性でなく、芸術的、美的に表現しゆく主体への現実性なのである。」このように書いたことがあった。(拙著教育学)

村野藤吾先生の生活と芸術の中に私はその生きたあかしを見た。先生は典型的な芸術家であり、自由人であられた。東京の会議で結論が出て、大阪に帰られる新幹線の中、先生はその決まった構図に僅かな疑点が生じて、大阪から東京に向けて、あの決定は取り消す。また近く上京して相談をやり直す。と電話されることが再々あったと聞いた。先生の前には、ただ自由と美の形のみがあったに違いない、面倒な人間のさまざまな関係や、煩わしい金銭上の事柄はその「直観と自由」の前には影をひそめたに違いない。そのことは、しかし、先生が世事をうとんぜられたというのではない。今年、秋になって設計事務所の近藤さんの奥様が亡くなられ、そのお葬式の折であった。

先生は奥様とご一緒に、ずっと門口に立たれ、柩の出るのをお見送りになった。やや遅参した私に「有難うございました。気の毒なことになりました」と沈痛な面持で言われた。同僚とその家族に対する、暖かい、やわらかい先生の思いやりの姿を私はそこに見たのである。

阪急や国鉄の窓に私は甲南女子大の白い殿堂を見て、それをホテルとばかり思っていた。一晩泊ってみたいと。そのホテルが私が京大退官後、特別に深い縁となった女子大であったのである。はじめてあの坂を上り、この丘に立って私は自分の目を疑った。そうして、今一度この建物に見入ったことであった。これは容易ならぬ芸術家の設計だと。村野藤吾という名前を聞いたのもその時であった。

そして半月もたたないうちに私は先生のご来訪をうけた。「村野先生がおいでになりました」と秘書の中西さんが言う。「村野先生という方は知らないんだが」といぶかる私に「設計者の先生です」と説明をきいて、私は恐縮して来賓室に急いだ。お一人で、静かに椅子に坐られた先生は、お立ちになって「村野です」と静かなご挨拶であった。文化勲章受賞者の先生の前に、如何ほどの時が過ぎたか、私はぶしつけに言ってはならないことを申し上げてしまったのである。「さすがにご立派ですが、いくら女子大学でも、すこし、ぜいたくに過ぎないでしょうか」と。事実、東大や京大には、このような構想の芸術的な建物は見られないから。先生は答えられた、軽い微笑をさえもたたえながら。「ものには、ひま、というものが需要でございます。学校の教育にもそれが需要じゃないでしょうか」これはまことに痛烈な一撃であった。私は完璧に打ちのめされた。五十年もの間、教育学の勉強と多少の実践をした筈の私の文字通りの敗北であった。そうして、改めて先生への敬慕の至情が湧いてくるのを覚えた。経験を積んだ人、もの事の奥底を見通した人、直観と自由の人……その生けるしるしが間違なく私の前にある。私は今、真の芸術家と言葉をかわしている。…それは不思議な風情であった。私はそのことを、はっきりと先生のお名前をあげて講演でも話し、新聞のコラムにも書いた。「朝日の記事を見ました」という先生の枯れた情念のこもっ

た筆跡のお手紙をいただいたのはその後間もなくであった。ものには、ひまが必要である。教育でもそうではないか。このような教は教育学の本にはなかった。英書にも独書にも。

それからというものは、私は先生に対しては希望は申し上げても、批判がましい発言は控かえた。「直観と自由」の人の前には、禁物は概念的な批判だと思ったからである。そうではなくて、その「直観と自由」を受け入れるか入れないか、その美に生きるか拒否するかであると思ったからである。不思議なことに、いや、まことに幸せなことに、私は素直に先生の芸術性に溶け込むことが出来た。それを愛することが出来た。読者よ、見給え。私たちの図書館を。あの構造については、私たちは一切を村野先生におまかせし、いささかの注文もつけなかった。あの建築は、完全に村野先生の芸術作品なのである。開館の記念式の折、私は他の来賓の方々と一緒に、先生をご案内申し上げて図書館に入った。今でも忘れない、あの一階の階段を踏みしめながら、先生は私に言われた。「私は満足です」と。同じ言葉を再度言われて、「世界一です」とつけ加えられた。それは容易ならぬ表現である。世界一ですとは。私はそこに絶大な自信と卓越した芸術性の力を見た。それを言い切る人の人間性の純粋さと偉大さを直感したことであった。

近くは、やがて見られるであろうロダンの「考える人」についてのことである。大学の開学二十周年とフランス文学科博士後期課程の認可を記念して、「考える人」を甲南の丘に迎えたいという念願が燃え上がって、京都国立博物館とパリーロダン美術館の好意に満ちた了解を得た頃、私は村野先生にそのことを相談申したのである。「先生の設計になる私たちの大学のキャンパスに、もし彫刻を置くとすれば、ロダン以外にはございますまい。『考える人』を計画しているのですが、是非先生のご賛同を得て、その建設について、場所その他のことを御指導下さいませんか」と。先生は、たいへんなお喜びであった。「ロダンはよろしいです。『考える人』はすてきです。パリーのロダン美術館で何回も見ました。見飽きませんでした。この丘に、そして、あの池のほとりに、それはすばらしいではありませんか」口早やにこのよう

に言われた。そうしてその場所を具体的に決めるために、ご多忙な中を三回も大学に足を運ばれた。大林組に命じて、パリーの像が置かれた台石と同じ大きさのものをベニヤ板で作らせ、それを管理棟前の池の東に置かせ、右だ左だのご指示があり、ご自分も芝生の上をあちこち歩るかれ、いろいろな方角から眺め、「そこでよかろう」とお決めになった。場所が決まるとこんどは大林組の監督に「考える人」の像を同じ長さの竹竿にマットを巻きつけさせ、ちょうど人間の半身大のものを作らせ、それをベニヤの台の横に立てさせ、また芝生のあちこちからご覧になり「空がいいでしょう、『考える人』のバックにはなによりです。」ご自分の手を南の空に向かってさし上げ、私を見てこう言われた。『芝生と青空でいいです。パリーの美術館は背後に樹木がありますが、ここはもうなにも植えますまい』

来賓室でお茶をさしあげると、しばらくお休みになって「ロダンとマイヨールですね。あれもすばらしい。女性が横たわっている像がありますが、それは美しいですよ。女子大生なら問題ありません。子どもだとちょっといたづらするかもしれませんが。あれはいいです」しきりに繰返された。二、三日たってその絵葉書をお送り下され、「今、神戸の近代美術館にいくつかの作品が陳列されています。為念」と認められてあった。「考える人」の場所決定のため三度も御来学になり、三回目は私が上京の為め留守したのであったが、大林組の監督に、台石の一番下の黒御影石の高さは、ちょうど芝生の面と同じようにするように。パリーとはちょっと違ってくるが、その方が、この風景とマッチする。このように指示されていた。二、三日たって「考える人」の絵葉書に、近くまた推参して、いろいろ申し上げたいと書いてお送り下さったのであったが、それが最後となった。

小諸城址の城壁のあの巨大な石に牧水の歌が刻まれている。

かたはらに秋ぐさの花かたるらく

ほろびしものはなつかしきかな。

村野藤吾先生は亡くなられた。そう思うことすら夢ではないかと尋ねたい心持である。なつかしい人、忘れられぬ人、「自由と直観」に生きた人、そ

の人の設計された殿堂の中で、私たちは歌い、読み、語っているのである。
カントは「芸術を教育することは不可能である」と言ったが、私たちは芸術
の中に生き、それを愛することは可能である。この丘で学ぶ日の続く限り。